

近接する2棟北が正面か

「前九年合戦時期の中心的建物を考える」をテーマに、東北学院大学の佐川正敏教授の進行で行われた、研究報告・パネルディスカッションの様子を紹介する。

佐川正敏氏
箱崎和久さんから、2016、2017年度の発掘調査で全体が検出された中心的建物について報告をいただきたい。

佐川正敏氏
箱崎和久さんから、2016、2017年度の発掘調査で全体が検出された中心的建物について報告をいただきたい。

原添下区域南東部の建



隣り合う2棟の遺構が見つかった原添下区域南東部の遺構配置図

物跡について、どういった建物だったかを考えた。

発掘調査では、SB01とSB02という南側の建物跡と、SB02という北側の建物跡が発見された。SB01は、身舎の部分の外側に、

柱穴列がSB01に伴うも

廂の小さな柱が東・南・西に巡る。SB02の柱は、SB01の身舎より細く、SB01の廂より大きい。2棟の間にはSB02に寄った位置で柱穴列が見つかっているが、この柱穴列がSB01に伴うも

のなのか、SB02に伴うものなのかは、発掘当初から問題だった。

この柱列が、SB02の南廂になるのか、SB01の北廂になるのか。そもそもSB01とSB02が同時に建っていた建物かどうかから問題にしなければならぬかもしれない。

結論としては、問題の柱列はSB01に伴うもので、廂が身舎の四周に巡る四面廂の建物と理解するのがよい。すると、SB01とSB02が非常に近接し、軒先がぶつかる形になるので、同時併存していたかどうかも問題になるわけだが、後ほど紹介するようにならぬといった建物の実例がある。

この場合、中心となる建物はSB01になる。身舎の柱は太く、四面に廂

それらは立地からも分かる。この区画は北と西をL字形の堀で囲まれているが、建物の背後には自然の谷(第2沢)があり、儀式などを行うには、建物の南のスペースはあまりにも狭すぎる。この建物群は北側に広がるL字形の堀で囲まれた広場を利用するため、北向きになつていと解釈できる。

パネル討論要旨 I

コーディネーター

佐川正敏氏

パネリスト

千田嘉博氏

本堂寿一氏

大平 聡氏

相原康二氏

高橋 学氏

箱崎和久氏

登壇者

(奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室長)

(奈良大学教授)

(国史跡鳥海柵整備委員会委員長)

(宮城学院女子大学教授)

(えさし郷土文化館長)

(秋田県埋蔵文化財センター副所長)

(東北学院大学教授)

考察 全盛期の中心的建物

金ケ崎の国指定史跡鳥海柵跡

9

2017年度シンポジウムより